

吉田城さんのこと

柏 木 隆 雄 Takao KASHIWAGI

思いもかけない知らせだった。和田章男さんから、さらに阪村圭英子さんから吉田城さんの死を痛恨の口調で告げられて、耳を疑い、一瞬声も出なかった。少し病状が悪化した、と知らされてはいたけれど、それこそ「昨日、今日とは思はぬものを」。暗澹たる気分で受話器を置いたとき、一瞬、「俊髭亡ぶ」という一句が思い浮かんだ。日夏耿之介が芥川の突然の死を悼んでの一文の表題が、その言葉だった。日夏がそこで、「かの年少気鋭といふ文字通りのまた、才氣眉宇にあふるといふ文字通り異能の」と若い頃の芥川を形容した、そのとおりの感慨を初めて吉田さんに会った時に思い起こしたことが、忘れかけていた日夏の一語を再び思い出させたのだろう。

それは実に若い吉田さんだった。年譜を見ると1979年から81年まで大阪大学言語文化部の講師とあるから、まだ29才になるか、ならぬかの時だったはず。何かのことで言語文化部のフランス語資料室へ出かけていって、大高順雄先生と話をしていたら、吉田さんがさっそうと入ってきて、いかにもきびきびと沢山の資料を、さっさとコピーして、傍の机に積み上げていた。阪大の卒業生でもないし、見知らぬ顔だなと思っていたら、大高先生が吉田城君だと紹介してくださった。とにかく途轍もなくできる人で、京大から東大の大学院、たちまちフランス政府給費留学生となってウルムのエコール・ノルマルで勉強、ソルボンヌでドクトラをあっという間に取って帰ってきた人ということだった。

当時の私は、今以上に怠け者で、フランス語を読むよりも日本語を読む時間の方が多く、結婚した当初から「フランス文学を勉強しているはずなのに、フランス語の本を読まず、怠けてばかりいる」と妻から呆れられ、「また怠けている!」と言われるのが嫌さに、机の上にはフランス語の本を置いて、ひたすらトイレで日本語の本を読み、「一日に何回トイレにいったら気が済むの!」と怒鳴られっぱなし。それでブルシエの試験も姉たちのお見物の案内と重なって、渡りに船と棄権、という情けない有様で、同時に受験することになっていた一年後輩から、試験場で柏木さんの名前が何度も呼ばれ、欠席を確認されていましたよ、と言われて赤面した人間なので、そういう若い、とてつもない秀才を紹介されて、ほんの通り一遍の挨拶だけでしたような気がするし、吉田さんも、ふらりと資料室に立ち寄った阪大のぱっとしない卒業生の一人くらの感想ではなかったか。

その彼が京大の教養部に移り、一年の後文学部が変わって、中川久定教授と名コンビを組んで、大いに活躍されていることは折々耳にしていたけれど、勤め先の神戸女学院大学で天国のような生活を満喫していて、ひたすらゼミの教え子たちや最初にフランス語と一緒に勉強した学生たちと愉快的時間を過ごしていたので、学会の活動も含めて、あまり外部に関心が行かなかった私は、吉田さんの活躍ぶりも風馬牛といった有様だった。

やはり私が思いがけなく阪大の文学部へ助教授として勤務するようになってからではなかったろうか。北村卓さんが3年間仏文研究室の助手を勤めて、言語文化部に転出したあとに、フランスでブルーストの草稿研究でドクトラを取って帰ってきた和田さんが助手になったので、彼から吉田さんのお仕事などをいろいろ聞くことになって、秀才吉田城氏の風貌とそのお仕事がぴったりと重なってくるようになった。また関西支部会で宇佐美斉さんの後に会計を務めたことで、いろいろ支部の仕事とも関わり、京大の方たちともつながりができ、ますます吉田さんの存在が実感され、また支部会でお会いするとやあやあと声を掛け合うようになった。

けれども吉田さんといっそう親しく話すようになったのは、仏文学術雑誌「エキノックス」の発行ではなかったか。日本フランス語フランス文学会の学会誌は、より多く、院生やオーバードクターの人たちの発表機関になっていて、本当の意味で学会の学的水準を示すものではない、というより、本来自己の研究を発表すべき専任教員が後輩にその場を譲っていることがあって、むしろ本来学者として立っている大学人がフランスを中心に欧米各国、世界に発信するフランス語の研究雑誌が必要だ、と考えた広田昌義先生が、東大の塩川徹也氏や吉田城氏などとも諮って、趣旨に賛同する者たちの同人誌的な研究専門誌の発刊を企てられた。今でも鮮明に記憶しているけれど、1986年の春だったか、秋だったか、それに加わることに賛同した人たちが発行を引き受けた臨川書店の会議室に集まって発足を議した第一回の会合は壮観と言えた。それぞれ仕事のし盛りで、意気あふれ、それこそ「才氣眉宇に溢れる」感じだった。私は末席にいてそれまで名前しか知らなかった方たちとも声を交わして、雑誌発行の意義をしみじみと思った。

「エキノックス」の第1号は1987年秋だから、もう20年も前のことになる。その号に吉田さんはブルーストの印刷刊行されなかったテキストの一部を紹介する記事を書き、翌1988年の第2号は彼が編集責任者となり（この雑誌は編集同人となった28名の研究者の誰か一人、あるいは数名が編集責任者として、内外の研究者と協力して作り上げることを原則とした。私もバルザック特集を2

度組ませて頂いている)「ブルースト特集」を刊行している。単に編集するばかりではない。発行所を臨川書店にっていて、印刷が出来上がると、早速発送作業がある。学生さんに手伝わせるのも、ということか、同人が集まってその作業をするのが常で、するとどうしても近くの京大の人たちがその任を負うことになる。私も出来る限り出て行って、宇佐美さんと稲垣直樹さん、大浦康介さんなどと一緒に何度か発送のお手伝いをしたが、その時に吉田さんの事務能力の端倪すべからざることをつくづく思い知らされた。私はいたって不器用な上におしゃべりばかりしていて仕事が遅い。やがてそうした作業は何号かののちに、吉田さんを先頭に、稲垣さんや大浦さんが主にやってくれるようになって、2002年秋発刊の21/22号をもって惜しくも終刊するまで続くことになる。

けれども驚かされるのは、もちろん事務能力ばかりではなかった。これも業績目録をご覧になればわかることだけれど、彼からどんどん送られてくる仕事の豊穡さ。『失われた時を求めて』の草稿生成研究の大著はもとより、フランス語の辞書を作るは、芥川龍之介全集の草稿過程の編集に携わるは、神経症者の文学という斬新にして、重厚な研究分野を開拓するは、翻訳はするは、ラスキンを訳し、かつ論じるは、文字通りの八面六臂の活躍に、私はただただ眼を瞠るばかりだった。たとえば『神経症者のいる文学』は「バルザックからブルーストまで」と副題にあるように、19世紀の主な文学者を材料に、みごとに彼らの作品の内にある、近代的神経症状を剔り出した手腕は、それこそ脱帽するほかない。

専門と名乗っている上は、その第一章の「バルザックと神経症の小説」について意見を言わないといけなだらうけれど、『谷間の百合』のモルソフ伯爵、フェリックス、そしてアンリエット・モルソフ夫人といった主要な登場人物の「神経症」ぶりを実に綿密に解き明かし、普通のバルザッシアンとはまた違った視点での作品分析は、頂いた時にお礼状に書いたことを繰り返せば、まことに「端倪すべからざる」ものがある。吉田さんがそれこそ専門でないのに、バルザック研究書をよく読んでいることもよくわかって、異才とはこのことかと思いを新たにしたものだ。そのことはこの本の「序章」においてもっとはっきりする。そこに描かれた「神経症」をめぐる話題の豊富にして、しかも単なる羅列に終わらず、きちんと見取り図が頭に整然とした形で入っていることが理解できる、じつに示唆するところの多い記述で、あとがきで彼自身、「以前から近代の小説に興味に任せて読み散らしているうちに」と言っている言葉が、銜いもなにもない、真正のもので、さればこそ、易々とこうした読み応えのあ

る著作ができるのだと実感される。「興味」なく、ただただ仕事をしなければならぬ、として書かれたものと本質的に違うのだ。

こうして書いてくると、いろいろ吉田さんのことが思い起こされて、なんとも言えない気持ちになる。拙文を送ったときに、きっちりと正字体の漢字に旧かなで書かれた葉書に躍っている心優しい言葉。研究会が終わったあとの懇親の席で、あまり飲めないビールも、皆と一緒に楽しむ風情、いつもにこやかで、時には吹き出すように大笑いする様子など。なによりもここ数年は宇佐美さんの主宰する人文研の共同研究会で一緒になることが多く、その席でいろいろ話したことが懐かしい。時には彼と2人で人文研の4階の会議室で研究発表したこともあった。最後の共同研究は宇佐美さんの停年退職の時に打ち上げとなるもので、その打ち上げの会で大いに盛り上がりたと思っていたのに、その前に亡くなってしまった。「天は二物を与えず」と言うけれど、吉田さんはそれこそどれほど天からの賜物を享受していたか。学力、学問、家族、同僚、その他諸々。しかし、たった一つ、一番大事な命、という賜物を、神様は、それ以外のものを与えすぎたためだろうか、まるで惜しむように、早々と取り上げてしまった。闘病生活は、ある意味で長きにわたったけれど、私たちが会う時はいつもにこやかで、そんなそぶりはみじんもみせなかった。そこに吉田さんの強い意志と人に対する優しい心遣いをみることができる。そういう生き方を自分がしてきたか、どうか。大いに反省させられるが、吉田さんの残してくれた著作やさまざまな思い出が、私を今後も鼓舞してくれるに違いない。

(かしわぎ・たかお 大阪大学教授)